

特集・針金かけ講座／盆栽を世界遺産へ／小品オークション直前情報

近代盆栽

11

2015

KINBON

From Japan to the World

特集

続・針金かけ ステップアップ講座

昭和53年3月2日 第3種郵便物認可
平成27年11月1日発行（毎月1回1日発行）
通巻457号

近代盆栽美術館

秋から冬へ 季節の移ろいを
盆樹に味わう

短期集中連載

日本の盆栽を
世界遺産へ



トピックス

京都五条坂、登り窯の最後

日本小品盆栽組合連動企画

小品・貴風

大オークション直前情報

特別頒布企画

限定・特価名品


ザ・バーゲン



特集

続・針金かけ ステップアップ講座

10月号に続いて今月も針金かけを大特集。巨大赤松を盆栽として再生する改作実技や、正面角度変更に伴う整姿実技からプロならではの感性と技術を解説。さらに入門間もないお弟子さんへの指導から、針金かけの基本と応用テクニックを詳細に紹介します。2号にわたる針金特集であなたの技術も格段に向上する…はずです！



赤松巨木

実技／漆畑大雅（静岡・静岡市）

苔聖園

作業日／8月10日

大らかな樹容を継承しながら盆栽へ導く

葉張りが2mに近いサイズ モンスター級の巨大赤松が出現！

作業前の赤松を採寸する編集スタッフ。身長180cmと大柄のスタッフだが、この樹の前に立つと小さく見えてしまう。大人4人がかりでようやく移動させることができる大きさで、一般的な大物盆栽のイメージからすると二回りほど大きな印象。



赤松 樹高155cm左右193cm 作業前正面
大きな丸鉢には入っているが、その樹体からすると庭木と表してもおかしくない寸法、迫力である。それなりに手入れはされていたようで模様木としての輪郭はとどめているが、単調に間伸びした枝も少なくない。

「面白い素材が入ったんですが、見にきませんか」との一報を受け苔聖園を訪問した取材スタッフ。作業場に鎮座していたのは、およそ盆栽のイメージからかけ離れた巨大な赤松であった。

漆畑氏によると、この赤松は四国に住む業者の元で長く培養されていた樹とのこと。これだけの大きさで幹肌の荒れや古色も素晴らしい素材。地元では有名だったようで、盆栽業者も何度となく譲渡の相談を持ちかけていたそう。これまで手放すことを頑なに断ってきた蔵者であったが、たまたま縁があり漆畑氏が入手。これまで某家から出ることがなかった赤松の巨木が、瀬戸内海を越えて静岡まで運び込まれることになった。

確かに荒れた幹肌が放つ時代感や古色、オーラは凄まじいものがある。しかし問題なのは樹の寸法。鉢縁からでも樹高は150cmを超えており、葉張りも2m近い大きさ。盆栽そのものに寸法の基準はないが、展示会出品を目標とする場合、展示スペースの制約を考えると、樹高が1mを超える寸法は敬遠されることが多い。このことを考慮するなら、樹高・葉張りの大幅な縮小が求められることになるのだが、漆畑氏はどのような判断を下したのだろうか。

作業台に乗せられた樹の前に、素材の正面検討から作業はスタートした。

圧巻の古色！ この幹の迫力を活かした正面構想を検討



旧正面の立ち上がり
サバ幹を見所として強調する意図で真正面にくる位置を正面としたようだ。立ち上がりも広く安定しており悪くはないが、上部の幹が単調で変化に乏しい。



新正面の立ち上がり
幹模様が見所として探して、旧正面から約45度振った辺りを正面に設定。見所であったサバ幹も左にあり、立ち上がりの安定感も悪くはない。幹の個性を活かせるとの判断で正面に決定した。

庭木のような寸法ではあるが、地植えすることなく鉢で長年培養されていた素材。単調な部分や枝の間伸びは多少は見られるものの、盆栽として致命的とも言える問題点は見受けられない。鉢足に合わせて正面も決められているようで、模様木としての輪郭を意識して培養されていたことが分かる。

面白さが分かる位置や角度を探したいと思えます。」と、漆畑氏は幹を注視しながら正面の検討を始めた。
やがて漆畑氏の手が止まる。「ここしかないですね。」と漆畑氏が示したのは旧正面から時計回転に45度ほど振った位置。サバ幹を左に残しつつ幹が大きくうねりながら伸び上がるように見える場所であった。この位置を正面とすると樹冠部がやや後方に反り返るような形状になるため、植え付け角度を手前に傾けるようにして漆畑氏は仮の正面を定めた。しかし、正面変更に伴って旧正面で右枝として作られていた枝が前方に回り込んでしまい、枝の整理をしなければせっかくの幹模様も見えない状態となった。

角度変更で樹冠の位置を修正する



新正面で左側から見ると、樹冠部が後方に流れてしまっているのが分かる。模様木とするならもう少し正面側（写真右方向）に移動したい。



植え付け角度が正面側（写真右側）に倒された。この角度変更によって樹冠予定の枝群が樹の中央付近に移動された。



正面は決まった！
しかし肝心の幹模様が見えない

漆畑氏が示した新正面。この正面で模様木とするのが漆畑氏が考えていた樹形構想である。ただし旧正面で右枝群を構成していた枝が正面側に回ってきたので、せっかくの幹模様が隠れて見えなくなった。

幹の凝縮で 樹冠を引き下げる

正面側に移動した枝を整理するより前に、漆畑氏は幹のたたみ込みによる樹高縮小から作業に取り掛かった。どの程度樹冠部が下りてくるかによって枝の長さは変わり、また枝の要・不要も判断できる。「この辺りで樹冠をまとめたい」との理想はあるが、まずはどこまで下げられるかを見極めてから下枝をまとめていく手順である。

漆畑氏は上部で屈曲する幹模様を利用して右後方にまずはたたみ込み、さらに上部を押し下げないように引き下げる構想を描いていた。しかし幹は直径が10cm近くあり、しかも古木である。ジャッキをゆっくりと引き絞りながら慎重に作業が進められた。



幹を曲げて樹高縮小を図りたいが、曲げる予定の幹は直径で約10cm。古木であることを考慮すると、簡単な作業ではなさそうだ。

幹中ほどで太幹を凝縮



鉄筋と幹を挟み込むようにジャッキがセットされた。ここからゆっくりとジャッキを引き絞って幹を鉄棒の方に引き寄せせる。



幹中ほどから上部に大きく屈曲した部位があり、その曲がりを利用してさらに幹を曲げ、樹高の縮小を図る予定。引っ張りのための鉄筋が固定され、ジャッキが当たった場所にゴム片が付けられた。

樹皮が少々裂ける程度であれば問題ないが、曲げに耐えられず折れてしまうこともある。また固定していた鉄筋が圧力に負けて外れるケースも多いので、音や手の感覚を頼りにゆっくりと作業するのがコツ。



さらに上部の幹を引き下げた



太い幹を押し下げないようにして樹冠の位置を下げる漆畑氏。樹が大きいので脚立を使っての作業である。



第一段階の幹曲げを終え（ゴム片の部分）、その上の曲を利用して幹をさらに曲げる第二段階の作業へと移る。

赤松は黒松に比べて幹枝の粘りが少なく、曲げると弾けるようにパンッと折れる「ポッキリ折れ」を起こしやすいとされる。重要な枝ほど枝折れのリスクを減らしたいので、ラファイアやテープなどの保護材を使って事前準備するケースが多い。しかし漆畑氏はラファイア無しで作業に取り組んでいた。「ラファイアを巻いておくと枝折れの対策にはなりません。ただ、曲げている時に負担が掛かっている部位がどうなっているか見えないのが嫌なんです。どこのぐらい樹皮が裂けているのか、どこまで無理が利くのかなど、手の感覚だけではなく実際に見て判断する方が安心して作業ができるので、枝折れの危険性が高い場所以外は極力使いたしません。でもラファイアを巻いておいた方が安全ではありますよ。」とのこと。



幹のたたみ込みによる樹冠位置の変化



第二段階の幹曲げ後。上部の枝群が大きく右下方方向に移動し、左側の枝が持ち上がってぽっかりと空間ができた。



第一階段の幹曲げ後。上部の枝がわずかに右側に移動した。



作業前の新正面

木片を使った枝折れ対策



④もう少し枝先を下げたいが枝元に割れが生じて危険と判断した漆畑氏は、途中に木片を挟んだ。



①幹曲げで大きく持ち上がった樹冠部左側の枝。



⑤木片を挟むことで、負担がかかる支点をずらす。枝先を下げてても力は木片の部分にかかると、枝元に余分な力が入らず割れを広げる心配がなくなる。



②幹曲げと同じ要領で針金による引っ張り力で枝を引き下げる。針金が当たる部位はゴム片で保護。



左枝群引き下げ後。



③上から押さえ込むようにして枝元から下げる漆畑氏。お弟子さんがゆるんだ針金を引き絞って固定する。

左枝群の空間を埋める枝操作

幹を引き下げたことで樹冠部は大きく右側に傾いたため、樹冠部左側にあった枝群が上方に伸び上がるような状態になってしまった。樹冠部の左下には大きな空間が生じてしまっている。この空間に持ち上がった枝を取めるように、枝元から枝が引き下げられることになった。

過度に枝元に負担がかかると元から折れる可能性もあるので、支えの木片を当てながらの慎重な作業となった。



樹冠部左側の枝が引き下げられ、上部の空間が埋められた。

左一の枝の移動と役枝の配置

樹冠部の位置がおおよそ決まったところで、まだ手つかずだった下枝群の整理と針金かけに取り掛かった。

最も問題となるのは樹の正面側にあり、幹を遮るように伸びている長い枝である。旧右下枝として長く伸ばされていた枝ではあるが、他の枝と比べて細く、しかも真っ直ぐに棒伸びしてしまっている。方向も悪く、役枝として

使うのは難しいのではないだろうか。編集スタッフの問いかけに対して漆畑氏は次のように答えた。

「模様木樹形にまとめるのであれば、この枝は重要ですよ。横から見ると分かるように、新しい正面位置では後方にわずかに枝が覗くだけで左側に枝がないんです。だからこの枝を左に移動させて左下枝を作るしかありません。確かに枝の分岐が少なく単調に見えますが、枝芯に振りを入れ、枝棚の配置を工夫すれば解消できます。枝が折れやすい赤松ですから一気には無理でも、時間をかければ理想的な位置への移動は可能です。」

枝折れ対策として枝元からラフィアが巻かれ、枝の移動が始まった。

左一の枝の変化を左側面より見る



樹が太いので針金が細く見えるが、6番線の2本巻きで枝の移動と固定を試みている。左手で枝元をしっかりと固定しながら渾身の力が込められた。



この枝が折れると樹形構想を根本から変えないといけないので、慎重を期して枝折れ防止のラフィアが巻かれてからの作業となった。

真っ直ぐに出ていた枝が左に動いた！



幹を横切るように伸びていた枝だったが幹の流れに添うように方向が修正され、左一の枝として使えそうな角度場所に移動できた。枝元の間伸びは気になるが他の枝を寄せて隠すことで修正はできるだろう。この枝の移動で模様木構想の骨格がようやくく見えてきた。



この単調な枝をどう活かして一の枝を作る？

幹を遮るように右方向に流れる枝(写真中央の枝)。枝元から枝岐までの距離が長く、変化にも乏しい。方向も悪く使うのは難しそうだが、漆畑氏は枝元から左方向に曲げて左一の枝とする構想を考えていた。

作業前・左側面より
豊富に枝がありそうだが左側は後方に枝が集中しており、役枝として使えそうなものが全く見当たらない状態だった。



前枝移動後・同
正面側にあった枝が左側に移動されたことで、何もなかった空間に左一の枝候補が生まれた。



下枝群整姿後・同



左一の枝を途中で切る

枝元からしっかりと曲げて左枝を一の枝として理想的な位置に移動させることに成功。この枝をどの程度の輪郭でまとめめるかが次の焦点となった。枝先まで針金が入っていない状態では必要以上に長大に感じるが、先端を持ち上げて細かく柵割りすると、差し枝として納めることはできるといふ。しかしやはり枝の単調さは気になるところ。枝の中間部付近の枝岐れまで切り戻すことで自然な模様が生まれ、単調さは回避できるだろう。今回の最終仕上げは左枝群がやや弱く感じられるかもしれないが、樹の将来性を優先して単調さを解消すべく、左一の枝は途中で切り替えられることになった。



幹を隠していた樹冠部下の前枝を切除。さらに長かった左一の枝の先端も枝岐れで切りつめられた。



正面側に出ていた枝が左側に移動されたことで、隠れていた幹模様がよく姿を現した。



下枝群整姿後・正面より
左右の葉張りや重なりを考慮しながら枝柵がまとめられていく。ようやく模様木らしい輪郭が出来上がってきた。

下枝としてのボリュームを考慮して残すことも検討されたが、やはり長すぎるとの判断で枝岐れの位置まで追込まれた。



さらに樹冠部下の枝も不要との判断で切除。今回大きく枝を抜いたのはこの2本も含めてほんのわずかである。



樹冠部整姿後・正面より

樹冠部の剪定・整姿



樹冠部を構成していた枝芯をわずかがが左方向に戻して、若干の樹高縮小が図られた。



樹冠部作業前・正面より



樹芯の引き絞りに。



鉄筋を使って樹冠部を左に引き寄せる。当初は下の位置で引き絞っていたが、さらに移動させるために上に針金の場所を変えて絞り直す。

枝（樹芯）の割れをお弟子さんに確認させながらゆっくりとジャッキを引き絞る。時間を少しあげると絞ることができるので、一気に作業しないことがポイントである。



盆栽サイズとはいかないが
この樹の理想となる姿が見えた



整姿後 樹高120cm左右160cm (鉢合成)

仕上りの状態をイメージしやすくするために、整姿後の樹姿を鉢合成で見せて頂く。

立ち上がりや幹の太味に対して樹冠の位置、葉張り等のバランスが良くなり、風格と気品を漂わせる姿にまとめられた。幹のたたみ込みによって約35cmの縮小を叶えてはいるが、樹高はまだ120cmある。盆栽という概念からすると大きすぎるくらいはあるが、幹と枝葉のバランスが良くなったので、写真からでは巨木という違和感を感じられず、ただ大きいだけのゴテ木ではないことが分かる。盆樹としてのバランスを考えると、この寸法にならざるを得なかったところであろう。

「展示会で飾ることを考えると、樹高や葉張りはさらに小さくするべきでしょうね。枝の絞り込みだけではなく芽接ぎなど、小さくまとめる方法は考えられます。でも今それをやるべきかは疑問です。この樹が備えている幹肌の迫力などの魅力は、現状でも十分に引き出せたと思います。」

今の輪郭を維持するか、さらに縮めるかは、これから樹と相談しながら考えていきます。迫力のある姿にまとめることができましたから、棚場に置いて目立つでしょうね。しばらくは看板木の役割を担ってもらって、じっくりと仕上げていきたいと思っています。」と漆畑氏は語った。